

幼児が自己を発揮するための援助の工夫 ～一人一人の幼児理解を通して～

宜野湾市立宜野湾幼稚園教諭 照喜名幸子

目次

I	テーマの設定理由	25
II	研究の構想図	26
III	研究目標	27
IV	研究仮説	27
V	研究内容	27～33
1	自己発揮	27
(1)	自己発揮の概念	27
(2)	自己発揮と自己抑制	28
(3)	自己発揮を発揮するには	28
2	個と集団	28
3	幼児理解	29
(1)	共感をもって理解すること	30
(2)	幼児の発達を理解すること	30
(3)	幼児の個性を理解すること	30
(4)	遊びを理解する	30
4	幼児の遊び	30
5	援助について	31
(1)	幼児の個性に応じた援助	31
(2)	幼児が遊びの中でどのような経験をしているかを把握する	32
(3)	朝の活動(好きな遊び)	32
(4)	設定保育	32
(5)	認める・叱るについて	32
(6)	怒ること・叱ること	33
VI	実践研究(保育指導案)	34
1	教師の想い	34
2	幼児の姿	34
3	ねらい	34
4	内容	34
5	展開	34
6	反省と考察	36
7	指導助言	36
	検証保育の様子	37
VII	実践例	38～48
	事例1	38
	事例2	41
	事例3	46
VIII	成果と今後の課題	48
1	成果	48
2	今後の課題	49
3	終わりに	49
	引用文献	49

幼児が自己を発揮するための援助の工夫 ～一人一人の幼児理解を通して～

宜野湾市立宜野湾幼稚園 照喜名幸子

I テーマの設定理由

近年の急激な社会の変化に伴い、幼児を取り巻く社会の生活環境も大きく変化してきた。また少子化、高齢化や核家族化、価値観の多様化等により人間関係の希薄化が社会問題にもなっている。その中で幼児の成長・発達に必要な、人とかかわりやお互いに成長し合う経験が充分にもてない現状が危惧されている。このような状況の中でうまく自己を表現することができず集団の中でお互いを認め合い自己を発揮して遊ぶことが苦手になっているように思える。

幼稚園の集団のなかで幼児どうしのかかわりを深め、友達と一緒にいる心地よさを味わい、友達を思いやる心を育てることで幼児は自己を発揮するようになると思う。

「幼稚園教育要領解説・平成11年6月・文部省」の改定の基本方針においては、幼児教育は「遊びを中心とした生活を通して一人一人に応じた総合的な教育を行うものである。」とあり、領域「人間関係」の[内容の取り扱い]として、「(1) 教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人とかかわる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働きかけることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら自分の力で行なうことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行なうようにすること。」が示されている。

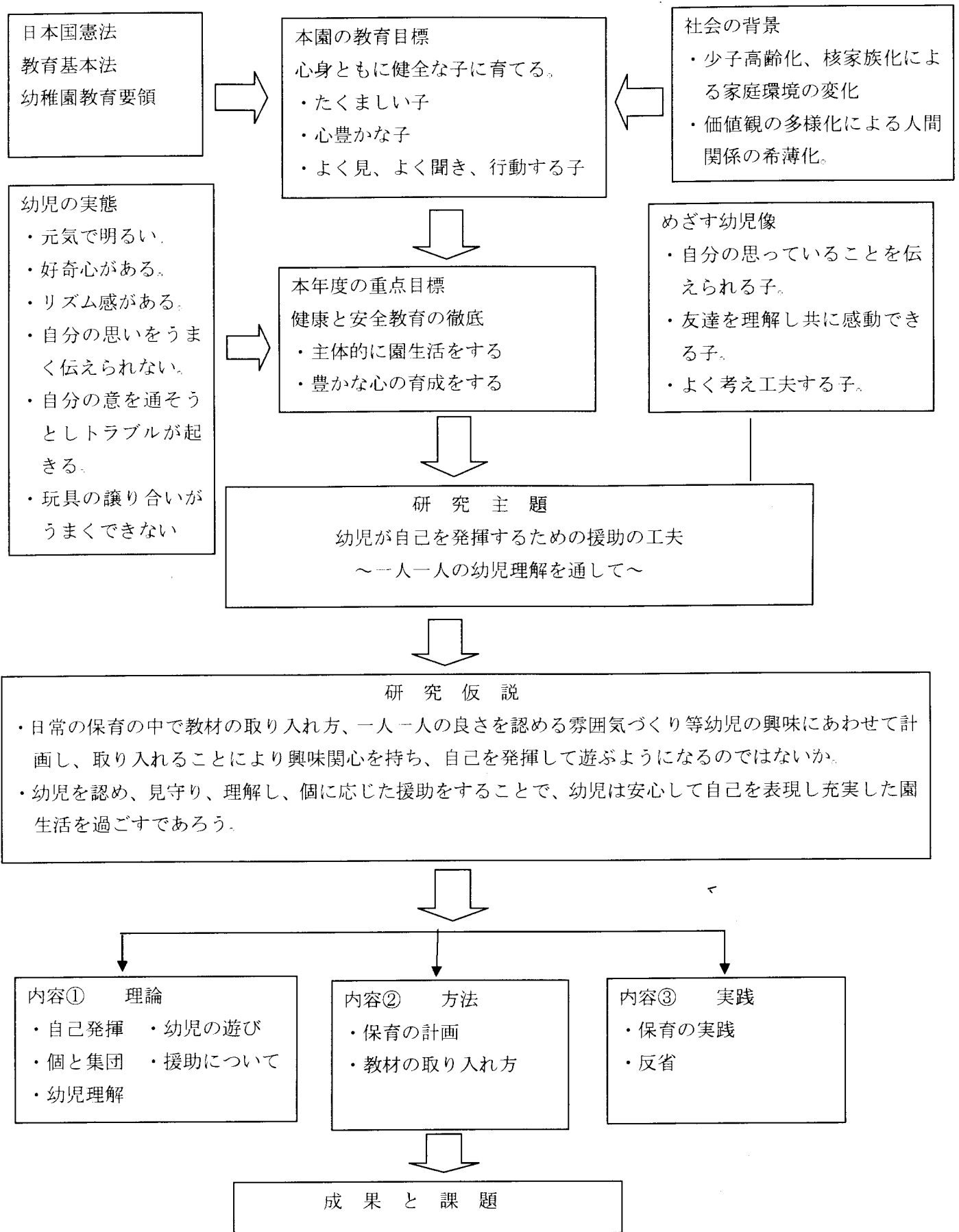
幼児は幼稚園という環境の中で遊ぶことを通して、多くの友達や先生に出会い、友達と一緒に楽しみ、やりとげ、充実感を味わうことができる。また、喧嘩をした悔しさ、寂しさ、悲しさ等、様々な経験を繰り返すことにより、友達を思いやり、理解する気持ちが育ち、人とかかわる力を学んでいくといわれている。そこに幼稚園教育の重要性があるように思われる。

ところで、本園の園児を見てみると、明るく、元気で、いろいろなことに興味関心を持ってかかわり、自分の思いをうまく伝えている子もいるが、反面、自分の考えていることを相手にうまく伝えられずに友達とぶつかったり、玩具を譲り合うことができない子もいる。

また、自分の間違いを認めることができず、自分を正当化し教師の話聞き入れることができない子や教師や大人とは進んでかかわろうとするが、友達どうしではかかわり方がわからず一人で遊んだり、いつも教師の側にいて自分の良さを十分に発揮できない子など多様な子ども達の姿が見られる。

以上なことから、教師は、幼児一人一人の内面を理解し、心の動きに応じた援助で幼児を認め、見守り、励ますことが大切であると思う。そうすることで、幼児は安心して行動し満足感や充実感を味わい自分自身の存在感を持ち自信を持って集団生活へ適応することができると思う。自分が認められることの安心感は相手を認める心が育つことにもつながる。日々の活動の中で幼児が自分の思いや発露を表現できるような場を設定し、一人一人の思いを引き出すことで、幼児一人一人が自分の好きな方法で表現し自己を発揮することが可能になると考える。幼児が自信を持ち自己を表現することで自己肯定感がもてるようになり、自立につながり充実した園生活を送ることができると思う。以上のことから日常の保育を通して、幼児の育ちへの教師の援助のあり方を考えたいと思い本テーマを設定した。

II 研究の構想図



Ⅲ 研究目標

幼児が自己を発揮できるため理論を深め、その場に応じた効果的な援助のあり方を研究する。

Ⅳ 研究仮説

- ・日常の保育の中で教材の取り入れ方、一人一人の良さを認める雰囲気づくり等幼児の興味にあわせて計画し、取り入れることにより興味関心を持ち、自己を発揮して遊ぶようになるのではないか。
- ・幼児を認め、見守り、理解し、個に応じた援助をすることで、幼児は安心して自己を表現し充実した園生活を過ごすであろう。

Ⅴ 研究内容

1 自己発揮

(1) 自己発揮の概念

幼児が集団の中で楽しく活動するには自分が思うこと、感じたことを自由に伸び伸びと表現することが大切である。

集団生活の中で秩序ある集団規律を保ち、伸び伸びと自分の持っている可能性を発揮し、自分なりの方法で表現することで、友達とのコミュニケーションを図りお互いの思っていること、感じたことを伝え合うことができる。

自分の思いを伝え合うことでお互いを理解し心の結びつきが深まり一人一人が主体的に活動することができるようになる。また自己を発揮することができないと、友達とのかかわりで自分の思いが表現できず対等な関係が保てないで友達に言われるままに行動してしまう。

自己発揮とは自分の内にあるものをことば、身体、リズム、絵画等自分の好きな方法で表現することである。伸び伸びと自分の感じたこと、考えたこと等を表現し自分の持っている可能性を自分なりの方法で発揮する、自己発揮することで友達とのかかわりも豊かなものとなる。

自己発揮とは、自分の内にあるものをことば、身体、リズム、絵画等自分の好きな方法で表現すること。

自主性とは、自分が何をしたいか、何を選びたいかを知り、ある程度の見通しをもって行動すること。

主体性とは、自分の考えや判断で行動しようとする態度であり、集団のなかでおたがいに自己主張しあい、葛藤しながら、認め、受け入れられるようになり自分たちで遊びを創り出していこうと意識していくこと。

(2) 自己発揮と自己抑制

幼児は感情の抑制が難しく、遊びの約束、決まり等のくい違いからいろいろなトラブルが生じる。

相手を受け入れられることと受け入れられないことがあるが自分の考えを変えたり、遊びのルールを変えたりして柔軟な対応ができるようになり、しだいに相手を受け入れるようになっていく。

(3) 自己発揮するには

幼児は自分の存在や立場を認められた時、安心して自分らしさを発揮することができる。日常生活のなかで自分を見守り、認め、励ましてくれる大人や友達がいる、自分の要求や気持ちを理解してもらい、ありのままの自分の感情を表現し、受け止めてもらえることで幼児は自分の内にあるイメージを表現し自己発揮できるようになる。

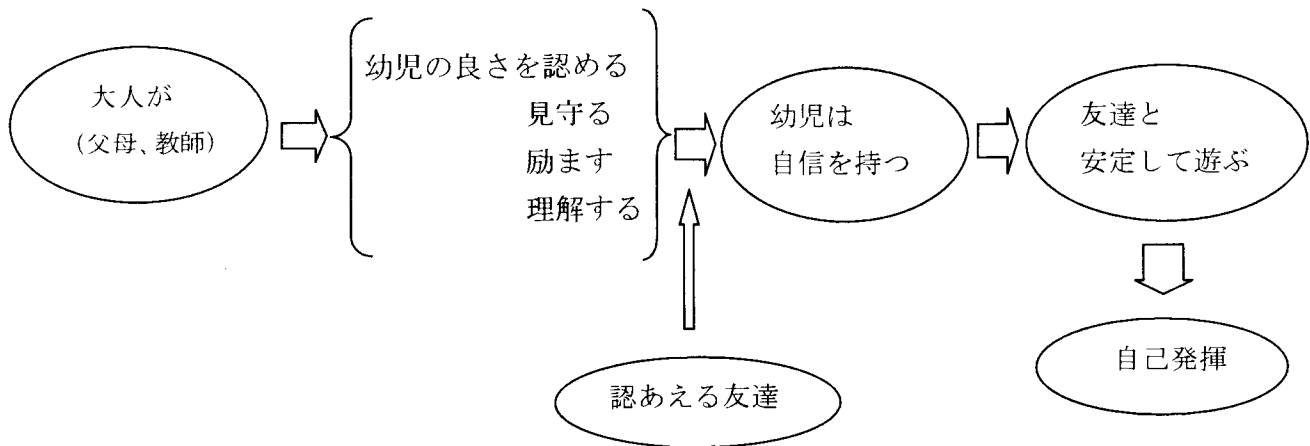


図1 幼児の自己発揮を支える要素

2 個と集団

子どもの成長には自我、自尊心、自発性の育ちが重要だと考えられる。自我の発達には乳児期からみられ、物を目で追いながら熱心に見つめている姿は自我、自発性の芽生えだといわれている。自己形成につながる自我、自発性、自尊心の育ちは大人が子どもを年齢相応に暖かく見守り育てていくものであり、幼児が最初に出会う環境、家庭教育に大きな影響を受けますが現代の家庭環境は、子どもの心を育てることが困難になっています。

『わたしの世界』から『わたしたちの世界へ』の中で、今井和子、神長美津子著書においては以下のように示唆に富んだ発言をしています、少し長くなりますがそのまま原文を引用したいと思います。「幼い頃からさまざまな欲求をありのまま受けとめてもらう環境の中で、つまずいたり、ころんだり、傷ついたり、元気を回復したり、人との葛藤を経験して、回復のしかたを年齢相応に学び、体験していくことが、子どもの自我の育ちを確かにしていきます。『躰は、親の良心を伝えていくこと』といわれますが、家族がお互いに心の通い合うことば(会話)をもたなくなっているのではないのでしょうか。

子どもの心が育ちそびれていく家庭でのもうひとつの問題が、『親の育児経験不足が子

どもたちに過剰なストレスを与えること』です。自分の子どもを生むまで、ほとんど子どもと接する体験がなく、出産と同時に親になってしまうことに現代の社会環境の貧しさがあります。親が子どもの発達を知らないために子どもに過度な要求や期待をかけ、思い通りに進まないとあせったり、怒ったり、その結果が育児放棄や虐待に及んでしまうことです。家庭において、『子どもの発達に見合った子育て』がなされるようになることこそ、今、最優先されなければならない社会の課題ではないでしょうか。子どもの発達、その中でもとりわけ大事なことが『心を育てること』です。情報化社会にあって、ビデオやテレビにたよる育児が子どものコミュニケーション力を低下させていくことも現代社会の課題です。どんなに知識が豊富であっても、自発性(自らやってみようとする意欲)がなければ知識をいかすことはできません。またどんなに利口であっても、人とのコミュニケーションができなければ、社会で自己発揮し生活していくことはできません。」と家庭教育の重要性と自我、自発性の育ちの大切さを述べている、また、同書のなかで幼児が自分という心の世界を大切にしたいという自尊心の育ちを大切にしています。自我、自発性、自尊心が育つということは、幼児がよりよい自分づくりをしているということなのです。幼児前期(1～3歳まで)は大人に見守られながら自分の内なる興味を探り自己拡大し、自我、自発性、自尊心を培い「自分(個)の世界」を育てている時期と考えられる。

自我とは、自己主張の源で、自分はどのような人間であるかを意識化していく力であり、幼い頃からありのまま受けとめてもらえる安定した環境のなかで幼児の自我の育ちは確かなものとなる。

自発性とは、その瞬間、その場において自ら自由に随意に行動することで、自発性の芽生えは乳幼児期のはじめからみられるといわれ、「赤ちゃんが、カーテンの揺れ動くのを、目で追いながら熱心にみつめているのは、すでに外の世界に、自発的にかかわりをもとうとする心の表われである」といわれている。

自尊心とは自分の尊厳を意識、主張して他人の干渉を排除しようとする心理で、幼児は、自尊心によって自分自身を支えていく内面が育っていくと考える。

3歳以後の幼児はさらに自己を拡大し友達、仲間を求めるようになる。集団の中で他児とかかわり、自分と周囲の幼児との違いに気づく生活を通して、お互いに自己主張しあい、葛藤しながら認め合い、受け入れていけるようになる。遊びの中で自己主張を育てることは大切なことであり、自己発揮できる子を育てることである。遊びを楽しくしていくためには一人一人の思いが配慮されないとおもしろくないのです。そのためには自己主張できない子を励まし、自分の思いを言えるように支えたり一緒にいて見守ったり、みんなで遊びを楽しめるように援助することも大切である。仲間との遊びの中で一人一人が身につけた力を出し合うことでお互いが影響をうけ成長しあっていくのです。「集団の育ち」

3 幼児理解

幼児は園生活を通して、いろいろな環境(人的、物的)から刺激を受け学んでいく。自分

からいろいろな環境に興味関心をもって主体的にかかわることにより様々な活動が展開されていく。教師は幼児を理解し、幼児の状態を把握することで環境を構成したり、適切な援助を行なうことができる。一人一人の幼児を理解し個に応じた援助を工夫することが大切である。幼児理解に関してはいろいろな観点から考えられるが、次の四項目をおいて考えてみました。

(1) 共感を持って理解すること

幼児一人一人の存在を認め共感することで、幼児は教師の暖かさを感じ自分が受け止められていると自信を持つと同時に教師に対する信頼も育っていく。

(2) 幼児の発達を理解すること

幼児の発達はほとんど同じような道筋をたどって発達していくと考えられるが、クラスの全体を見渡したとき、幼児の月齢、家庭環境、生活環境、などから一人一人の幼児個々に違いがみられる。言葉での表現が苦手の子、生活習慣が身につけていない子、運動的な活動が苦手な子等、幼児一人一人に今必要な経験は何かを明らかにし必要な経験をしていけるように援助していく。

(3) 幼児の個性を理解すること

人はその人の持ついろいろな能力、これまでの生活経験などが複雑にからみあって、それが個性として表われる、明るい子、おとなしい子、活動的な子等、幼児の個性を考慮しながら幼児の行動を理解する。

(4) 遊びを理解する

幼児の遊びの興味、関心をよみとり十分に楽しめたかを観察する。楽しいという気持ちがあってはじめて遊びからの体験が生きて来る。また充実感、満足感は次の活動への原動力となる。遊びをより楽しく発展させたり、遊びを通して幼児の発達に必要な経験ができるように工夫しながら幼児を理解していく。

4 幼児の遊び

「幼児の遊びは、結果を考えないでそのもの自身を楽しむ活動である。他人から指示、命令されなくて、本人が自発的に行なうものであり、たのしみ満足をともなう活動でそれ自身が目的である。」(村山貞雄著書)

遊びは、幼児の発達に応じた生活適応の方法であり、遊びかを通して多く学んでいる。身体の発達や健康の増進を育み、遊びの中でいろいろな刺激を受け好奇心や探究心を抱き挑戦し、知識、想像力、社会性等を培っている。

幼児は友達との遊びの中で自分の考えを通そうとすると、お互いの意見のくい違いからいろいろなトラブルが起き喧嘩をする姿がみられる。

喧嘩することで相手の存在をいやというほど心に刻みつけることになり改めて相手のことが見えるようになる。自己主張することと、主張しても通らないことがあるということと両方を体験する。

その体験を繰り返すことで自己主張の限界を知り、どうすればよいかを判断する力が生まれ友達を受け入れることを学び、友達の意見を取り入れて遊ぶようになる。限られた友達から輪が広がりグループで遊ぶようになり、グループとの目的を共有し行動することができるようになる、共有する喜びがわかりグループの信頼関係が育ってくる。遊びは幼児にとって大切な学習の場であり遊びを充分楽しむことで望ましい発育、発達をしていくことができる。

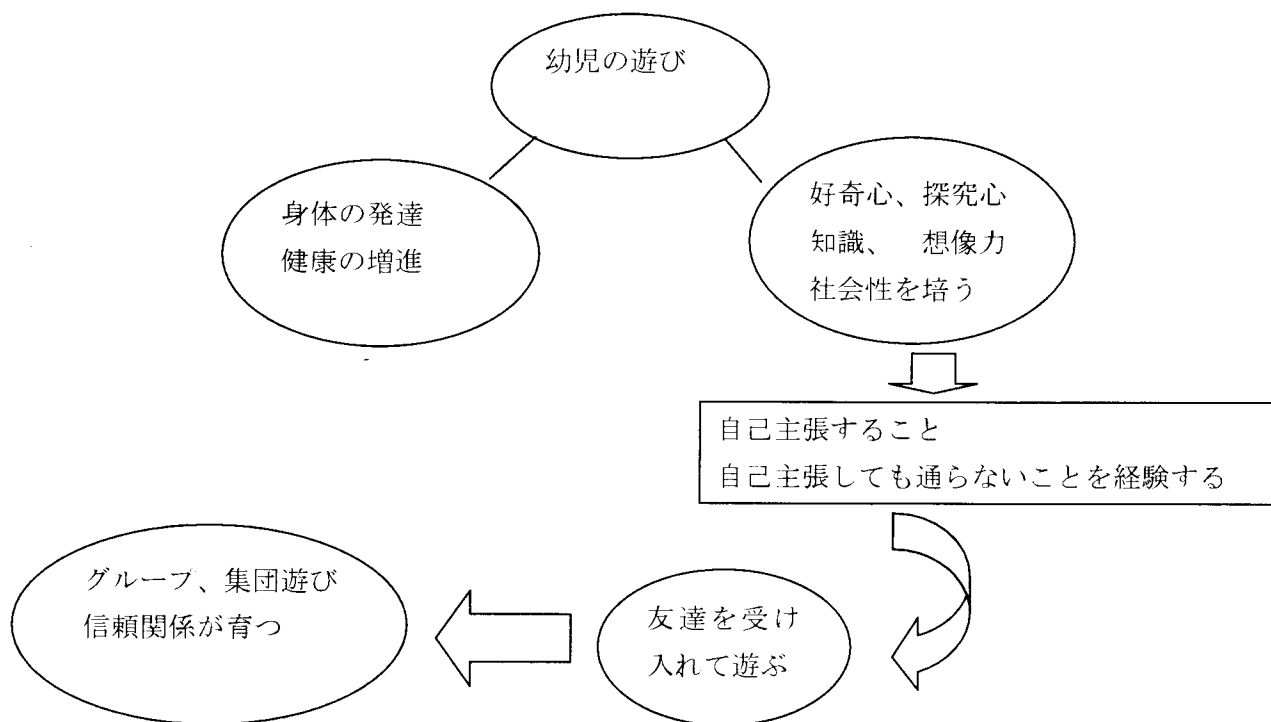


図2 遊びの中での育ち

5 援助について

幼児は、自分の存在が周囲の大人に守られている、受け入れられているという安心感をもつことで、積極的に行動し挑戦していく。

幼稚園においては、幼児が安心して生活し自分を表現できるよう幼児の活動を見守り、心の動きを理解するように努めたい。また、幼児どうしのかかわりを育てるために、友達との共通の体験ができるような機会や場を作って、環境を整えることも必要である。

幼児が遊びの中で、何に気づき、何を考えているかを読み取り、そのことを認め励ましていく、幼児がきがかからないことはどのような援助で気づかせていくかを工夫していく。そうすることで自立心も育ち自己を発揮し主体的に活動できるようになると考える。

(1) 幼児の個性に応じた援助

- ・ 幼児一人一人にはいろいろな個性があり、個人差がある。遊びへのかかわり方、感じ方も違ってくる、教師は一人一人の個性を理解し、幼児に必要な援助をしていくことが大切である。
- ・ 教師が幼児一人一人の気持ちを受け入れ、幼児が安心して自分の気持ちを表現できる集団の雰囲気をつくる。

(2) 幼児が遊びの中でどのような経験をしているかを把握する

- ・ 幼児がままごとで遊んでいるとき、お母さん、赤ちゃんの役になりたい子、料理を楽しんでいる子、好きな友達がいることで安心して遊んでいる子等同じままごと遊びでもそれぞれの自己表現の仕方が違う。
- ・ 幼児一人一人がどのような遊びをしているのか、一人一人の遊びの傾向、遊びを楽しんでいるか楽しめていないのか、仲間との関係はどうかを把握する。

(3) 朝の活動(好きな遊び)

幼児一人一人が自由に遊びを選び自主的に遊びに取り組む活動。

幼児はいろいろな環境にかかわって楽しい時間を過ごします。

教師は遊びの仲間になってアイデアを提供したり、幼児が願っていることが実現できるように手助けをするといった直接的な援助や、幼児の遊びを見守り、安定した気持ちで自分の思いを出して遊べるような間接的な援助、遊びが発展するために必要な環境構成等を工夫する。

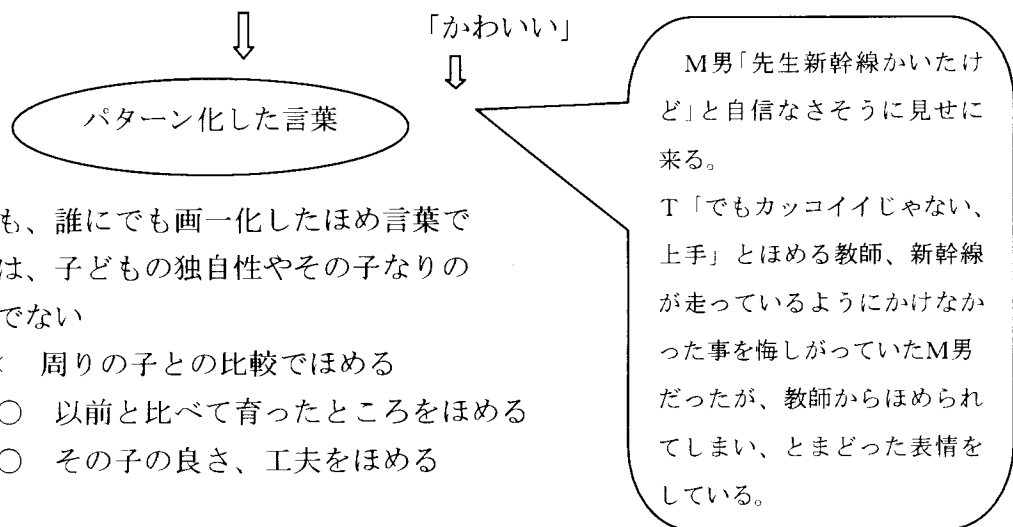
(4) 設定保育

設定保育も援助のひとつであり、クラス全体に経験させたい活動があり、クラス全体が経験することに意味がある活動。個人差を配慮し、幼児一人一人が楽しかった、おもしろかったという満足感、充実感を持てるよう援助を工夫する。幼児一人一人のよさや可能性を生かすクラスづくり。

(5) 認める・叱るについて

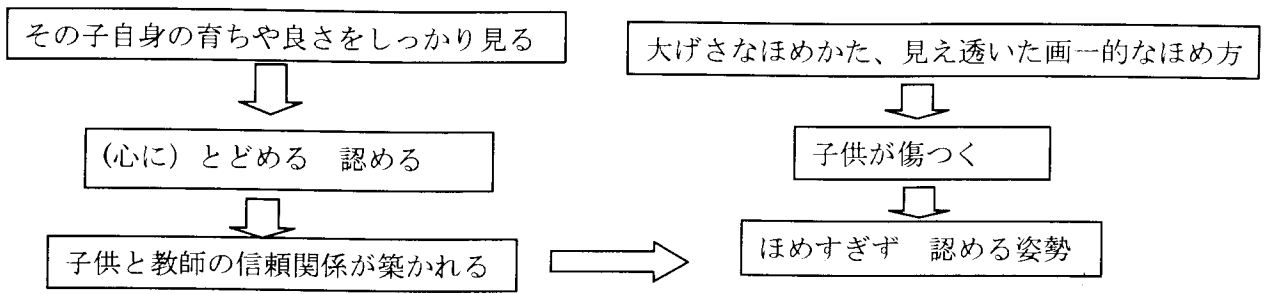
子どもをほめたり、叱ったりすることは、子どもが自己発揮しながらも、何が良いことであり、悪いことかを知り周りの人たちがうまく折り合いをつけ自律していくようになるためだが、大人から子どもへと、一方的に縦の関係でなされるため、いろいろな弊害も生じる。

今、保育者が一番良く使うほめ言葉 ⇔ 「上手」、「カッコイイ」、「すごい」



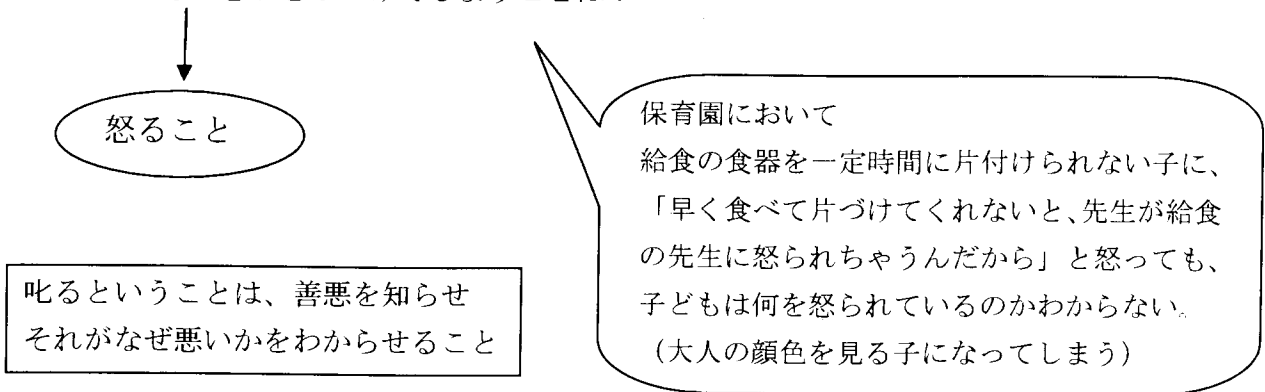
教師がいつでも、誰にでも画一化したほめ言葉で対応することは、子どもの独自性やその子なりの育ちをつかんでない

- × 周りの子との比較でほめる
- 以前と比べて育ったところをほめる
- その子の良さ、工夫をほめる

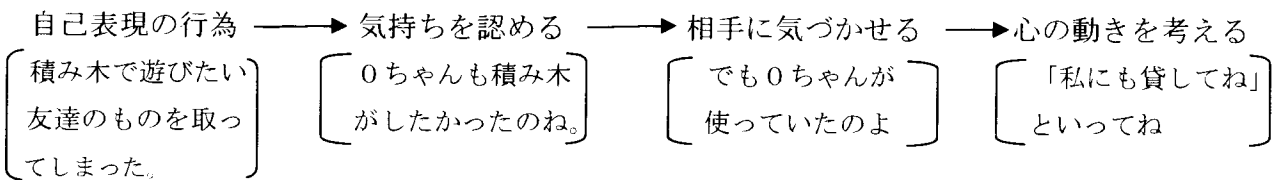


(6) 怒ること・叱ること

子どもを叱るといいながら、教師が自分の感情をコントロールできず、感情のはけ口として子どもに怒りをぶつけてしまうことは？



叱り方のポイント



- ① へりくつを言わせるような叱り方はしない
 - × 「何でこんな事をするの？」 「だって～」
 - 「～するつもりだったのね。」 自己確認の対応
- ② 短い言葉で厳しく
 - 例 「静かにしなさい」「電車のなかだから」
- ③ 例 「〇〇ちゃんに噛まれて痛かった」
 - 「だからやめて」

※ 子どもを私物化せず、一人の人間として尊重する。
子どもと向かい合う大人の姿勢が大切、叱ることをしなくなった保育者は親しい子どもとの間に通いあう大切な共感のひとこまを放棄しているといえないか。

※(5)、(6)については浦添市教育研究所「研究報告集録」第26号より引用

VI 実践研究

保育指導案

平成16年1月28日(水)

宜野湾市立宜野湾幼稚園

教諭 照喜名 幸子

対象級 たんぼぼ組

男12名 女15名 計27名

1 教師の想い

自分の気持ちを素直に表現できるようになってほしいとの願いから、園児との信頼関係の構築、友達とのかかわりの援助、朝の会、帰りの会で機会を見のがさず子ども達を認め、励ますことに視点をおき保育を進めてきた。ふりかえって、クラスの子ども達をみると、友達と深くかかわり相談しながら遊びを発展させている姿がみられるが、中には遊びを深めることができない子やかかわりの弱い子、もみられる。その点を踏まえ、集団遊びを取り入れ友達と喜びを共有し、満足感、充実感をくり返し経験させることで、自発的に自己を表現することができるのではないかと考えゲーム遊びを設定した。

2 幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・元気で活発な子が多く友達を誘い合い、進んで遊びに取り組んでいる、また友達とかかわっているが深くかかわることができず遊びを深めることができない子もいる。 ・こま回しができるようになり、友達とだれのこまが長い間まわるか競い合い楽しんでいる。 ・朝の会、帰りの会で自分の思いや作品を紹介し満足している。 ・遊びの中で友達とうまく話し合いができずトラブルが起きることがある。 ・おゆうぎ会に期待し楽しんで取り組んでいる。 	
3 ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム遊びを通してグループ意識を育て、お互いに協力して遊ぶ楽しさを味わう。 ・日常の保育の中で自分の思いを出せない子がグループで喜びを共有することで自己を表現することができる。 	<p>4 内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達とかかわりながら喜びを共感しあう。 ・グループでジャンケンのお話し合う中で、自分の思ったことを友達に伝え、友達の思っていることに気づく。 ・友達と楽しく遊ぶ中で決まりの大切さに気づき、守ろうとする。
5 展開		
時間	予想される活動	教師の援助と環境設定
8:30	登園 所持品の始末をする シールを貼る 草花への水やりをする。 飼育動物の世話をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつを交わしながら健康状態を把握する。 ・所持品の始末ができていないかどうか確認し、できていない子への声かけをする。 ・ジョーロ、バケツ、エサの準備をし、子ども達が使えるようにしておく。

9:30	<p>好きな遊びをする こままわし、竹馬、縄跳び カルタ、積み木、フープ</p> <p>片付け</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・安全面に気をつけながら子ども達の遊びを見守る。 ・友達どうしのかかわりを見守りながら個々にあった援助をする。 ・子ども達が遊びやすいように教材、遊具を準備しておく。 ・遊びに使ったものはもとの場所に戻す、チリを拾う。 ・片づけができない子は声かけをして一緒に片づけをする。
	<p>リズム遊びをする</p> <p>ジャンケン、ゲーム遊びについて話しあう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンについて、手で足で、体で。 ・ゲーム遊びのルールを守る ・1つのグループで同じジャンケンを決め全員同じジャンケンを出す。 <p>ゲーム遊びをしての話し合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・以前に遊んだ「手と足グーパー」のリズムをすることでジャンケンに興味をもたせる。 ・ジャンケンの話し合いがうまくできないグループには教師が加わって話し合う。 ・遊びに入れない子は一緒に加わり、遊べるようになると離れて見守る。 ・R君、S君、A子、N子がグループでうまくかかっているか、楽しめなくてグループから抜ける子がいるときは、どこでつまづいているのか把握する。 ・子ども達が、満足感を持っていないようであれば、ジャンケン列車を取り入れる。 ・ジャンケン列車はきるだけ子ども達にまかせて見守り、ついていけない子は援助する。 ・遊びの途中で話し合いが必要なときには、静かにさせ話が全員に届くように配慮する。 ・ゲームが盛り上がるように得点表を準備する。 <ul style="list-style-type: none"> 机、椅子を片付けておく。 準備する物 —— テープ(手と足グーパー)、得点表 ・声が小さくて聞こえない子は、再度、教師がみんなに伝える。 ・うまく話が進められない子は「何が楽しかったの」「○○さんは、こんなことをしたかったんだね」など、子ども達が話しやすい雰囲気を作る。
10:50	<p>ミルクを飲む</p> <p>絵本をみる</p> <p>帰りの会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・当番への声かけ ・静かに、楽しんで絵本をみられるよう配慮する。 ・今日の活動について話し合う、みんなの前で発表したいこと、みせたいこと。
12:00	降園	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に気をつけ道草しないで帰るように話し合う。

6 反省と考察

朝の活動のままごと遊びは、子ども達は、食器棚、流し、たんす等思い思いに移動して遊んでいるが教師から見るとままごとコーナーが雑になってみえる、引き出しをはずして積み重ねたり、人形の洋服や、タオルケットがあちらこちらに落ちている。「おへやがちらかっているみたいよ、これでいいの」、「うん」と返事がかえってくる、「なにか、ドロボウガ入ったお家みたいよ、少し片付けない」、と声を掛けるとR子、M子、N子が笑いながら手伝ってくれた。

グループ、ジャンケンで、体で、グー、チョキ、パーを表現することを数名の子にしてもらうことで子ども達の中から笑いが出てきて友達の表現を楽しんでいた。「ぼくもやりたい」、という声も聞こえてきたので他の子ども達にも表現を楽しませたかったが、時間的に無理があるので進めることにした。1グループで13人でおなじジャンケン出すのはグループの協力が必要で最初はなかなか揃えることができなかったが、数回繰り返すことで揃えることができた。教師の予想より早くできた、「子ども達はここまで協調性が育っているんだ」と感心した。グループ、ジャンケンで「グループ意識を育てる、協力して楽しく遊ぶ」のねらいは、ほぼ達成されたと考えられるが、子ども達の様子を見てみると「物足りなさ」を感じたので最後に「ジャンケン列車」を取り入れることで満足感が得られるのでは、と思い取り入れた。ゲーム遊びの反省の中で多くの子が自分の考えを発表できた、時間の関係で発表できなかった子には心残りがした。

- ・ ままごとコーナーは、子ども達は自分のイメージを豊かに出して遊んでいて遊びを展開している、気になることは、コーナーが雑になったとき、声を掛けたほうがいいのか、子ども達に任せたいほうがいいのかどうか考える。
- ・ グループ、ジャンケンは初めて取り入れた遊びで、予想が立てにくく、「全員で遊ぶには多すぎないか、半分に分けて遊んだ方がいいのか」迷ったが、子ども達は全員で遊ぶことができた、子ども達に拍手をおくりたい。
- ・ 反省で指摘があった、「だまれー」と言ったR君には、目と目をあわすことで感じてもらえると思ったが、遊びが終わってから、R君に「優しい声で教えてあげようね」と声を掛けたほうがよかったと反省する。
- ・ ジャンケン列車は経験した遊びでどの子も楽しめると考え子ども達にまかせていたが、ジャンケンのタイミングを外し立ち止まっている子への援助の仕方をもっと考慮する必要がある。

7 指導助言

- ・ テーマにそっての子ども達のかかわり」が育っている。
- ・ 今は人の話をきちんと聞く、今は話しをするんだという子ども達の態度が身についている。子ども達を見ていると、生まれてわずか5年しかたっていないのによくここまで育ったと感動する。
- ・ 指導案の記入については、ゲーム遊びの内容が活動になっている、援助については、気になる子への援助の仕方等、援助について書き入れたほうがいい。
- ・ 最初にねらいをおいてあるが、展開にねらいがあるので全体のねらいをおいて、仮説をおいた方が流れとしてはいい。

検証保育の様子



うん、うん



はい、はいぼくが
やりたいです



足を出して手を
たたくんだ



Kたちのジャンケン、
そろってないから負けだよ



おれたちの
そろってないな



おれ、ゲーだそうかな



Ⅶ 実践例

事例1 カバマダラを観察を通して絵画で表現し自己を発揮する

幼児の活動

6月

カバマダラの幼虫をみつけた

園庭でカバマダラの幼虫を見つけ子ども達に声を掛けた。

子ども達 「これ何の虫」

T 「カバマダラの幼虫だよ」

N 君 「カバマダラって何」

SU 君、 「わかる、みたことある」

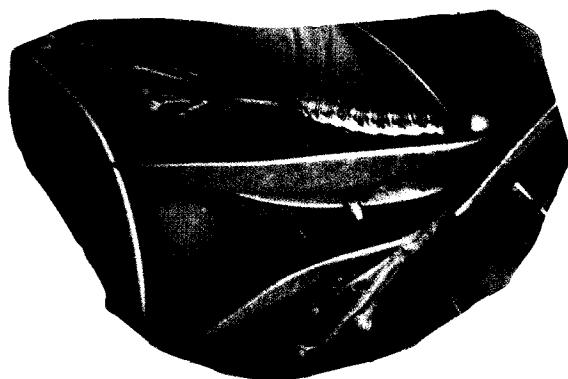
T 「幼虫がね、大きくなってチョウチョになるよ」

部屋へ持っていき観察ケースに入れるみんなが、よってきてみている。

SU 君が「これ、カバマダラよ」と教えみんなを観察している。

教師の想いと援助

園庭でカバマダラの幼虫をみつけたので子ども達と一緒に観察する。カバマダラに興味を持ちどんなチョウチョになるかな、など友達と話し合いながら観察している。



「カバマダラの幼虫の絵を描いてみない」となげかけると、子ども達は、「かく」、「かく」、「おれ絵かけないのに」など返事が返ってきた。描けない子は先生が手伝うから描いてみようとはなし絵を描いてみる。

RI 君 「先生俺描けないよ」

T 「先生と一緒に描くから大丈夫、RI 君幼虫ってどんな形している」

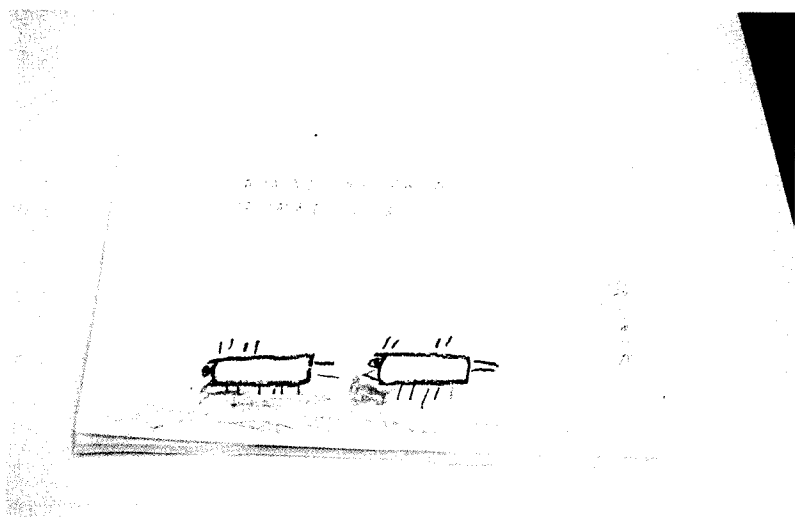
RI 君、「こんなして、こんな、こんな」

T 「そうだね、幼虫はこんなして長いんだね」

教師と話しながら手を動かしている。

RI 君 「描けた、先生描けた」と喜んでいる。

幼虫の観察画なら抵抗なく描けるだろう、幼虫の観察をし形、特徴を理解するのにいいと考えた。RI 君は「描けない」と言っていたが、細長い形を捉えるとその後は描けるようになった。他の子ども達も楽しそうに描いている、代わる代わる幼虫を観察しながら、色、形、などを確認している。絵を描き終えた子には、絵に自分の思いを書いてもらう。字を書くのは教師と一緒に書く。「次はサナギになったところを書こうね」と声を掛ける。



幼虫がサナギに成長し、Y君、「先生カバマラダがサナギになっている」と職員室に駆けてきた。

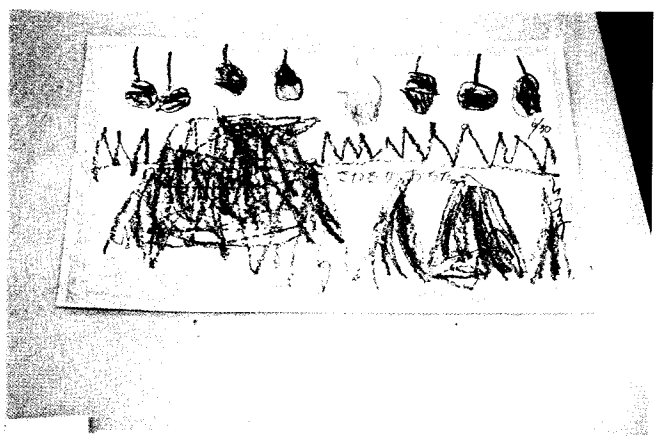
「夜にサナギになったのかな」と子ども達の関心が深まった。「サナギを描こう」という声が聞こえてきた。観察ケースの上にぶら下がっているサナギ、木の枝にぶら下がっているサナギ、「下に落ちたの」と観察ケースの下に落ちたサナギ等思い思いに想像して描いている。

M子 「サナギが下に落ちているの」
 T 「なんで、落ちたの」
 M子 「ねむっているの」
 T 「ねむたいのかな」
 M子 「いい気持ちって、寝ている」
 T 「ああ、いきもちなんだね」

絵を描くのに抵抗を持つ子もいるがカバマラダの絵は楽しんで描いている。観察画ではあるが形、色は子ども達の思いに任せる。

RI君は「こんなでいいのかな」など一人で話しながら描き「できた」と満足そうにしている。

M子にはサナギが眠るのもぶらさがって眠るよりは床に寝たほうが気持ちいいと思えたのでしよう。



7月 サナギからチョウチョに成長し登園したM子が不思議そうにみている。他の子も不思議さと喜びの顔でみている。

N子 「チョウチョになっている、かわいい」

MO子 「かわいいね、きいろいね」

M子 「お母さんになったのかね」

SU君 「先生、チョウチョどうするの」

T 「どうする」

U君 「にがせばー」

SU君 「うん、にがせばー」

M子 「飛びたいなー、蜜がのみたいっていつてる」

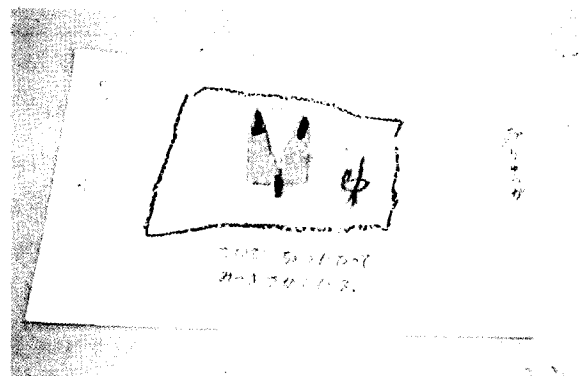
T 「そうだね、お空に飛びたいのね、お腹がすいてお花のところに行きたいだね、みんなが見たらにがそうね」

その後チョウチョの絵を描く。

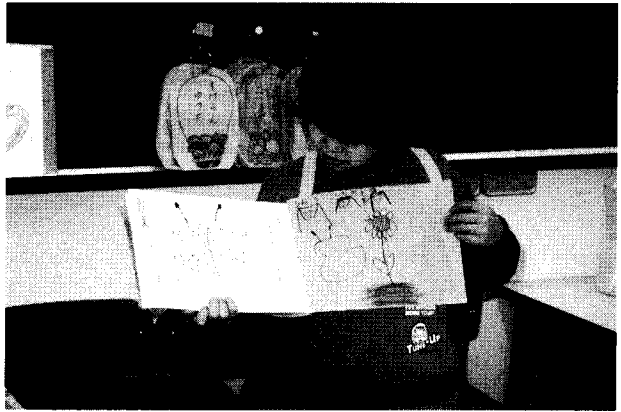
お花にチョウチョを描いて、「蜜を飲んでいる」「空を飛んでいる」、「チョウチョの運動会」など友達と話したり、教えあったりしながら得意になって描いている。

蝶の成長を通して小動物に対するいたわり、やさしさ、小動物を大切に作る心が育ってほしい。

観察ケースに入っている蝶より飛んでいる蝶のほうが好きなのでしょうか。「にがせば」、「飛びたいなー」、「蜜をのみたい」と蝶の気持ちになって話している。



カバマラだの観察画を楽しみ、絵本を作った。自分で描いた絵を絵本にすることで、自分の絵本ができたことを満足している姿が見られる。みんなに自分の絵本を見せたいとMA子が言い出し見せることにした。それぞれの子が代わる代わる絵本を読んだ。声が小さくて聞こえない子、みんなの前に出ると声がでない子、見ている子から「聞こえない」という声が届くので教師が代弁したり、援助をしながら進める。



考 察

カバマラダの幼虫を飼育し成長を観察するなかで、世話をし、いたわりや、やさしさを学んでいる。カバマラダの観察画は抵抗なく描けるのではないかと考え取り入れ絵本にすることで、自分の絵本ができた満足感を味わっている、自分の絵本をみんなの前で読むことで満足感を味わっている子ども達の様子が見られ、「自分もやりたい」と代わる代わる読んでいる。子ども達が上手に読める、声が大きく出せたことに重点を置くのではなく、「みんなに絵本を見せることができた」、「自分もできたんだ」という経験をさせることを大切にしたい。その経験を繰り返すことで自信をもち、安心して自分を表現し自己発揮できると考える。

事例2 R君との信頼関係を築く

R君について

家族は父、母、本人、弟、妹、赤ちゃんがいてなかなか構って貰えない様子である。母親は忙しさもあり弟、妹の世話をR君にさせていて、友達や弟、妹と遅くまで遊び親どうして心配して一緒に探しに行ったことがなにかある。

R君は自分のやりたい事を優先して行動し、片付けの時間も遊びの続きをしていたり保育中何度もトイレに行き水遊びをしている。「トイレで水遊びしないよ、みんなが部屋で待っているよ、」と呼びかけてクラスで待っているがなかなかこない、友達に注意されると自分を

正当化し聞き入れようとしない。できないことに関しては「どんなしてやる」と教師を追いかけてでも聞いて最後までやり遂げようとする。自分の興味のあることには時間をかけてコツコツと取り組んでいる。

6月

T 「みんな、もう、座れたかな」

全員 「はい」

T 「あら、R君どうしたの、まだなの」

R君一人で廊下で、牛乳パックで遊んでいるので声を掛けるがうつむいたまま遊んでいる。しばらく様子を見ることにしクラスで保育を進めているが、R君はなかなか部屋に入らない。

T 「R君の耳聞こえないの」

R君 「うん、うん」

T 「おはなし聞いているの」とR君の牛乳パックを取る

R君 「なんでR取る、これRのだよ、かえせ」

T 「先生さっきからお話しているんだよ、R君聞いているの」

R君 「せんせいが取るからきかんさー」

T 「違うでしょう、R君が聞かないから先生は取ったんでしょう」

R君 「せんせいが取るからさ、Rのだよ、かえせ」

T 「わかった牛乳パック返すからちゃんとお話してよ」

牛乳パックを受け取るとR君はホールに走っていった。しばらく様子を見ることにする。

教師の想いと援助

遊びの中で友達がR君のことで、教師に訴えたとき、片づけができなくて教師に促されたとき、話し合おうと声を掛けると、逃げて話し合うことができない。R君の手を取って話そうとすると「はなせ、はなせ、なんでつかまえる」、「捕まえているんじゃないよ、お話しているんだよ」、「つかまえているさ、はなせ」、手を離すと逃げてしまう。何度もそれをくり返してきた。

R君にかかるとクラスで待っている子ども達にかかわれなくなるので、気になるがしばらく様子を見ることにした。

11月

いつもの3人R君、T君、Y君でウサギ小屋で遊んでいる。

R君が、U先生の方へ駆けて行って先生に「Y君、が首を絞めた」、と訴えている。U先生が話しかけると走って逃げた、U先生は追いかけて、話しをしようとして声を掛けるがどんどん逃げていく。その様子を見ていたので私は、R君を捕まえて「R君どうして逃げるの」と話しをする。

R君 「なんでつかまえる、離せ」

T 「R君、U先生はR君とお話していたんでしょう何で逃げるの」

R君 「つかまえるから逃げるさ」
T 「U先生はつかまえてなかったよ、お話ししていたんだよ、でもR君は逃げたでしょう」
R君 「つかまえるから逃げるさ」
T 「U先生はつかまえてなかったよ」
R君 「先生つかまえているさ、離せ」
T 「U先生の話をしているのでしょ、」
U先生 「R君、ちゃんとお話してごらん、Y君がね、R君が首しめたって言っているよ」
R君 「Y君が首しめた、はなせ」
T 「手、はなしてからお話ししようね、手を離したらお話できる、逃げないで話して、」
R君 「にげる」
T 「逃げるんだったら、手、離せないよ」
R君 足で教師の手を蹴っている。「離せ、離せ」
T 「こんなしても先生は手を離さないよ、手を離すからお話ししようね」
R君 「信じられない」
T 「信じられない？R君とお話ししようって行っているんだよ」
R君 「離せ」と泣き出した。

教師の想いと援助

「泣いても手は離さない、お話ができないと手は離さない」ことを、はっきりと云え今回は教師も譲らないことにした。しばらくしてR君は泣き止んだ、片付けの曲が聞こえて他の子ども達は片付け始めた、U先生はクラスに行きR君、T君、Y君で話し合うことにする。泣いても、許してもらえないことが分かったのか話すようになった。R君は、Y君が首をしめたと譲らなかったが、ウサギを見て遊んでいるときに、R君がY君の首をしめたようでお話し合うことで本人も認めた。「R君、人間はね、首をしめるとどうなる」、「しぬ」、Y、T、君も「しぬ」と答える、「そうだね、死ぬときもあるのね、首はね、とても大切なところなんだよ。友達の手をしめたり、押ししたりしたら息ができなくなって苦しいんだよ、死ぬこともあるんだよ」等話しあうことでR君に謝る気持ちになった。「R君、逃げないできょうのように話ができるようにしようね、お話ができるようになって先生もうれしいよ、きょうは少しおにいちゃんになったみたいよ」。

考察

R君との会話のやりとりがいつも気になる、いつでも「自分を守ろう」という気持ちが働いているのか自分を弁護し相手の言うことを受け入れようとしない、また、話がかみ合わず会話の受け答えがうまくいかない、R君の気持ちをうまく引き出すことができない。

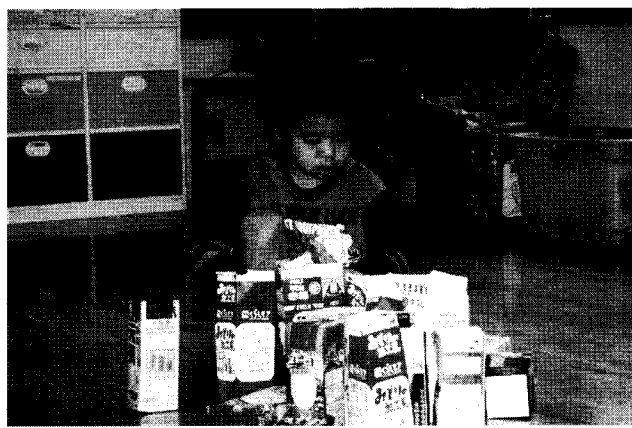
R君の「信じられない」という言葉から大人に対する不信感がうかがわれるので機会をみつけて母親と話し合ってみようと思う。

母親との話し合いの中から

参観日を利用して母親と話し合った。「何かあるときはいつも R に話を聞いてから下の子に話しているので怒られると思って逃げている、自分が R だけに言うから怒られるとおもっている」。母親は、弟、妹たちの世話で忙しく落ち着ついて R 君とゆったりと話すができない様子が伺えた。できるだけ分かりやすいように R 君にあわせて話をしあげようにと話し合う。

11月

S君と、牛乳パックのボーリング遊びをしている、R君とのかかわりを深めるために一緒にボーリングをしたり、声を掛けたりする。遊んでいるうちに人数が増えて、R君は早く倒したくて並んで待っている子を追い越して始めようとした、「だめだよ、順番だよ」それでもやろうとしている、「R君、みんな並んでいるよ、R君も並ぼう」、R君は、しばらく教師の顔をみていたが後ろに下がって並んだ、遊んでいるうちに牛乳パックを黄体に並べたり、くっつけたり、また順番を守らなかつたりして、他の子ども達から批判の声が聞こえた「ちょっとまって、まって」といいながら進めている。他の子ども達が不満を言い出した。「R君みんなが困っているよ、ボーリングできないよ」、R君は、ゆっくりなおしながら後ろに並んだ。



片付けの時間になると、他の子は片付け始めたが、R君はあっちこっち歩き出した。「R君、片付けよう、」と声を掛けるがいつのまにかいなくなってしまう。

H先生が「R君片付けは」と呼んでいるがR君は走って逃げている。

T 「R君、何で逃げるの」

R君 「追いかけるからにげるさ、」

T 「どうしたの、お話ししよう」と声を掛けるが聞き入れようとしない、やっと追いついて手を取って「どしたの、さっきは、ボーリングして楽しく遊んでいたのに、なんで逃げているの」

R君 「Rに放送させないからさ、Rがかたづけてくださいって言うって言ったのに」

T 「R君、放送したかったの、だれに言ったの」

R君 「Y先生に言ったのにさせないからさ」

T 「Y先生に聞いてみようね」

Y先生も一緒に話し合う。R君は、Y先生に話したつもりでいたが、しっかりと話ができなくて、他の子が希望して放送したようである。R君は話し合いの中で自分か伝えられてなかったことがわかり納得した。

教師の想いと援助

R君は、自己を主張することはいいが相手の話を聞こうとする気持ちが弱くそのためトラブルを起こすことが多い、ボーリング遊びで友達に批難されたが、今回は自分を抑える気持ちが芽生え友達の言うことを受け入れることができた。友達とのかかわりに少しずつ深まりももてるようになってきた。また、自分が放送できなかったのはなぜなのか教師と話し合うことで原因がわかり理解し受け入れることができた。R君にはできるだけ具体的に時間をかけて話し合うことが必要である。

U先生の話の中から

保護者からY君、T君、R君がまだ家に帰らないと電話があったので一人一人話しを聞いてみたが、「R君遅くまで遊んだの」と聞いたら「ここが痛い」と足を指で指す。もう一度聞いても「ここが痛い」と言って話ができなかった。

※R君はそのように話がかみ合わないことがある。しばらくそういうことがなかったので安心していましたが、まだ話のかみ合わないことがあるようだ

2月

おゆうぎ会を通して、縄跳びに挑戦したR君は自分で進んで選んだのだが、「できない、できない」と思うように飛ばず嫌がっていたが、何回も練習し挑戦している姿が見られた。また、自己を充分に出し切って身体の全身で表現し歌を歌っている姿も見られた。

考察

R君は友達とのかかわりの中で相手を受け入れる力がまだ育ってないこともあるが、以前と変わり顔の表情が穏やかになり相手を受け入れることができるようになってきた。なによりも逃げないで話を聞くことができるようになった。R君の援助のあり方については、これでいいのか、まだ方法があるのでは等迷うことも多く援助の仕方についてはこれからも考えてみたい。

事例3 友達との遊びを楽しめないS君

幼児の活動

5月

みんなの前で発表することが好きで子ども朝会やクラスで、自分の思っていることを発表して満足している。言葉が豊富で言葉づかいもやさしい。園庭で警察ごっこをして意見の違いでそれぞれの子供達が自己主張し話しがまとまらず、S君は仲間から抜けてしまった、そのことを子ども朝会で「警察ごっこは楽しい遊びなのに怖い遊びになってしまいました」と自分の思いを表現している。

教師の思いと援助

S君は家では母親や家族とのかかわりが多く家族と一緒に遊んでいる様子が見られる。一方では子どもどうしのかかわる経験が少ないように思える。子どもどうしの自己主張のためのトラブルはS君にとっては戸惑いを覚えたようである。それでも自分の主張を通そうとしているが他の子ども達から受け入れられず仲間から抜けていった。それが「怖い遊びになってしまった」との表現になっている。

SU君 「先生、S君が泣いて、お家に帰るって」

T 「どうしたの」

SU君 「SI君が虫を殺したって泣いている」

T 「SI君どうしたの」

SI君 「ごめん、って言ったのに、虫踏んだから許さんって、あやまったのに」

S君 「SI君が、虫を踏んだので虫が死んでしまいました。」

T 「そうなんだ、かわいそうだね」

S君 「うん」

T 「[SI君、虫がいるのわからなかったみたいよ、S君にごめんなさいってあやまったの」

S君 「うん、」

T 「どんな、ゆるしてあげられる」

S君 「もう、しないんだったら許してあげる」

母親との話の中で

家で絵本や、虫の図鑑をみて過ごすことが多いらしく小動物にたいする愛着があるようで、「足で踏んだ」ということがS君にとっては考えられないことだったのでしょ。



9月

S君 「先生、一緒に遊ぼう」

T 「S君も一緒に積み木で遊ぼう」

S君 「Sは、先生と遊びたい」

T 「先生ね、いま M 子とあそんでいるの、S君も一緒に遊ぼう」

しづしづ仲間に入る三人で積み木を重ねて遊んでいる。「これはここには置かないほうがいいよ」M 子がおいた積み木をよける、「なんで、M 子が置いたのに」「ううん、ここには黄色いのを置いたほうがいいよ」、M 子が自分の積み木を置く。S君は何も言わないで積み木遊びからぬけていった。

S君は「遊ぼう」と教師に声を掛けることが多く、その中に他の子が加わることを嫌がる。他の子が入ると抜ける。教師と二人のときは長時間遊んでいる。教師は、自分に合わせてくれるが、子どもどうしのかかわりでは自分の思うように遊べない。それがS君には嫌なのである。

11月

R君と楽しそうにボーリング遊びをしている、S君とR君二人とも子どもどうしのかかわりが弱い。ボーリングを一緒にするというかかわりであり、深いかかわりは持てない。会話は聞こえるが、一方的会話になることがある。それでも、二人にはいい経験である。R君が自分がやりたいように牛乳パックを並べ替えることでトラブルが置き教師も一緒に話し合う。しだいに仲間が増えそれぞれ自己主張しトラブルを抱えながら遊んでいる。

S君とR君にとっては自らかかわり、二人で作った遊びである。お互いの意見の食い違いの場では教師がそれぞれの意見を相手に分かりやすいように伝え二人の仲を取り持つようにする。S君もR君も他の子とのかかわりを学び、相手を受け入れる態度が少しずつ育ってきている。



1月

以前R君がS君の嫌がることをしたようで、R君が「一緒に遊ぼう」と言うと、S君は「R君とはもうお友達しない」と突然言った。R君は、驚きわけが分からないまま、その場をはなれた。その日のお弁当時間に、今度はS君がR君に「一緒に食べよう」と誘った。S君が知りたいことをR君が知っているから誘ったようである。R君は「さっきお友達しないって言ったさー」だから「S君とは食べない」と答えたのでS君は泣き出した。R君の気持ちが分かったようである。R君は「いいよ、一緒に食べよう」と言って二人で仲良くお弁当を食べていた。

S君はR君に「君とは食べない」と言われ、自分が「R君とはもうお友達しない」と言ったことを思い出し、R君の気持ちを考えることができたようである。R君は泣いているS君を見て「いいよ、一緒に食べよう」と受け入れることができた。

S君とR君がお互いに相手の気持ちを考えることができたことを喜びたい。

考察

自分の思いを通して楽しく遊びたいS君は、子どもどうして遊ぶことで自分の意見が通らないことを経験し、また、一緒に遊ぶことで起きる友達一人一人の自己主張を経験し、友達との遊びを楽しめないでいる、そこで教師と遊ぶことで居心地のよさを覚え教師と二人で遊びたがり他の子が加わるのを嫌がることもある。遊びの中でトラブルが起きたときお互いの意見をきき言葉の足りないところを補い相手を理解できるように話し合うことが大切だと思った。S君は自分が思っていることは言葉や絵などで十分に表現でき長所がありその点を伸ばし、体を動かして集団とのかかわりを多く経験させることがよいと考える。

VIII 成果と今後の課題

1 成果

- 子ども達が自分の思っていることや、自分で作った作品等を発表する機会を多く取り入れ、あるいは子ども達のよい点を認めクラスで紹介することで、目が輝き満足している子ども達の姿が見られた。
- 子どもが伸び伸びと表現するには、クラスの雰囲気や信頼関係が大きく影響することがわかった。
- 乳幼児の自我、自発性、自尊心の育ちを大切にし、大人がゆとりを持って付き合い、自我自発性、自尊心を十分に育てることの大切さを学ぶことができた。



2 今後の課題

- ・ 幼稚園の生活で安心して自分の思いや考えを話したり、ありのままの自分を表現できるような雰囲気作り、自分の思いを素直に表現し、友達の思いも受け入れ、支えあい、認め合うことのできる集団作りをめざしていきたい。
- ・ 一人一人の幼児を理解するための、教師間の共通した幼児理解や保育姿勢を再確認し保育を進めていきたい。
- ・ 教師がゆとりを持って一人一人の子どもにかかわれるための、行事の精選や計画、園の運営のありかたを考えてみたい。
- ・ 幼児の自己発揮と援助の仕方について研究を進めてきたが思うように進めることができず、まだまだ不十分である、今後とも研究を進めていきたい。

3 終わりに

本研究においては「自己発揮」とはどういうことなのか、なぜ「自己発揮」をしないといけないのか改めて考えさせられる毎日でした。研究としては、まだまだ未熟ですが自分の保育を見つめ直す機械となりました。研究で得た成果をこれからの実践に生かしていきたいと思えます。

研究を進めるにあたってご指導して頂きました沖縄女子短期大学非常勤講師、名嘉萬里子先生、研究所の新垣英司先生、には心暖かい御指導を頂き深く感謝致します。温かく受け入れてくださいました研究所の所長初め職員の皆様有り難うございました。また子ども達の情報を提供して下さり、支えて下さった宜野湾幼稚園の職員の皆様に感謝致します。共に研究を作り上げくれた小さな協力者の園児の皆さんありがとうございました。そして6ヶ月間を共に過ごし、何かと支えになって下さいました同期研究生の皆さんに感謝いたします。

《引用文献》

- (1)文部省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館，平成11年6月，3－86頁
- (2)今井和子・神長美津子『「わたしの世界」から「わたしたちの世界へ」』フレーベル館，2003年，3－5頁
- (3)日本幼年教育研究会編『幼児教育キーワード集』明治図書，1990年，58頁
- (4)村山貞雄『要図保育学辞典』明治図書，1990年，6頁
- (4)下地章子『幼稚園における道德性の芽生えを培うための援助の工夫』『平成13年教育研究員録』，26号 浦添市立教育委員会，2002年，7－8頁

【参考文献】

- ・ 森上史朗・岸井慶子編2『新・保育講座 保育者論の探究』ミネルグァ書房，2001年
- ・ 加藤茂美『子どもの自分づくりと保育の構造 続・保育実践の教育学』新保育論2
- ・ 近藤充夫・栗原泰子『幼児教育原理』学分社，1997年

